

---

# 幻想、神社と忘れ物

霧っぽい空気

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想、神社と忘れ物

### 【Nコード】

N7244Z

### 【作者名】

霧っぽい空気

### 【あらすじ】

幻想郷に現れた記憶喪失の少女。住人達と交流し、親睦を深める中で、とある「異変」そして彼女の運命が動き出す・・・  
所々、原作と食い違う点があるかもしれませんが、よろしければおつき合ってください。

## 神社での出会い（前書き）

原作キャラを叩きのめすようなバトルがありません。閲覧の際には原作ファンの方など、特にご注意ください。

## 神社での出会い

現世とはちよつと違った場所に存在する、外界と完全に隔離された世界“幻想郷”。

人間、妖怪、吸血鬼やその他諸々が共存しているこの平和な世界での出来事。

博麗神社にて

幻想郷の東の端の端、長い長い石段をずっと登った先にあるのがこの神社である。この神社の巫女、博麗霊夢は今日も参拝客と賽銭のなさに頭を悩ませていた。

「は、毎日来るのは魔女とか宴会目当ての奴らばかりだし、神社に来るならお賽銭ぐらい入れなさいよ、誰のお陰でこの幻想郷が・・・ぶつぶつ」

縁側に腰掛けてそんなことをぼやく。いくらぼやいたところで現状は変わらないのだが、ストレスの発散ぐらいにはなる。

「それにしても、空だけは今日もむかつくぐらい青いわね・・・」  
今日も快晴、満天の青空が広がっている。青い空を見ながら、気分転換に青いお茶でも飲もうかと霊夢が腰を上げた、その時、

「おや、ストレスが溜まってお疲れでしょうか？」

「!?!?」

いつの間にか、横に妙ちくりんな格好をした少女が座って、ここに笑いながらこちらを見ていた。

「って、誰よあんた」

服は上下のタキシード。頭にはシルクハットをかぶっていて、服にも帽子にも銀色の線で幾何学的な模様が入っていた。

霊夢と同年代くらいの背格好の少女なのだが、見れば見るほど奇妙な服装だ。

「おっと、これは失礼。私はいわゆる、奇術師わたくしというものです」

「奇術師・・・？道理で服が奇抜なわけね」

そう言つと、相手はまたもや笑う。よく笑う奇術師だ。

「はは、お褒めにあずかり光栄です」

「で、何しにここへ来たわけ？冷やかしだったら、さっさと帰つてよね」

すると少女は、ポケットから何やら紙を取り出した。

「ここにお札があります。種も仕掛けも無い、只の紙幣です。確認しますか？」

差し出されて霊夢が確認すると、なるほど、相手の言つとおり普通の紙幣である。

「さて、これを四折りにして帽子の中へ入れてしまいます。それでは一、二、三・・・おや、さっきのお札はいずこへ！？」

少女が帽子の内側をこちらに見せたが、中に入れたはずの紙幣は影も形も無かった。

「・・・で？」

「・・・で？と言われますと？」

「まさか・・・それで終わり？」

霊夢はかなり白けた様子で言った。そんなこと、はっきり言つてどうでもいい。

「おやおや、ご満足頂けませんでしたが・・・なら、そこのお賽銭箱の中身、確認してみてはいかがですか？」

「・・・？何を言い出すかと思えば・・・」

そう言われて、賽銭箱のふたを開けると、

「え！？お金が入ってる！」

「ふふ、どうですか？お賽銭です、どうぞお納め下さい」

箱の底に、四折りにされた紙幣が一枚、ぽつんと入っていた。

「今のはどうやったの！？あなた、普通の人間よね？」

「ふふふ、奇術の種は闇の中。それは絶対に内緒です」

霊夢が尋ねると、少女は嬉しそうに笑って答えた。まるで、待つてましたと言わんばかりの笑顔で。

「へー、奇術師ってこんな事ができるのね。話には聞いていたけど、初めて見たわ」

「おお、初めて見た奇術が私の奇術わたくしとは、身に余る光栄です」

少女が帽子を取ってうやうやしく一礼をした。少々大袈裟に見えるが、変に着飾っていない言い方だった。

「あ、ちようどいいわ。お茶でも飲んでいかない？ご馳走するわよ」  
「おお、かたじけない。ごちそうになります」

数分後、お茶が入ったので二人並んで縁側に座る。そして茶を啜った。

「ふーむ、美味ですねえ・・・」

「あら、良かった。おかわりもあるわよ？」

「いえ、これでけっこうです。ありがとうございました」  
湯飲みを置くと、少女は立ち上がった。

「もう行くの？というか、これからどこへ行くつもり？」

「行くあてはありません。ただ行った先で、いろんな人に私の奇術を見てもらう、それでいいのです」

「待ちなさいって。どこか泊まれる場所を見つけておかないと、夜になったら冗談抜きで死ぬわよ？ひとまず、この神社を生活の拠点にしなさい」

「・・・よろしいのですか？」

「ええ。あなたに居てもらった方が、何だか楽しそうだし」

霊夢はにこやかな表情で言った。

「では・・・お世話になります」

「ところで、あなた名前は？」

「何も分からない・・・ね」

「はい・・・」

神社の中の居住スペース。座布団を二つ敷いて、二人は卓袱台の上で向かい合っている。

「ますますあきれるわ。そんな状態でほっつき歩いたら一日もたないわよ？命が」

ため息を一つついて霊夢が言う。この少女に話を聞いてみたところ、何も覚えていないというのだ。

この幻想郷ではどんな事態も起こりうるが、これはまた厄介な現象だ。

「す、すみません」

「いや、そっちが謝ることじゃないわよ。まあしばらくここにいるといいわ」

「すみません、重ね重ね、お世話になります・・・えっと」

「私は博麗霊夢よ、これからよろしく。さて、早速だけど、宿賃代わりにちよっと手伝いをしてもらおうかしら」

「あら、あなただけっこう手際がいいのね」

「恐れ入ります」

今は二人で神社の境内を掃き掃除している。記憶喪失だと言ったので、掃除の手順を理解してくれるのか霊夢としては少し不安だったのだが、そんなことはなく、少女はすぐに手順を飲み込んでくれた。それに、いざやらせてみると結構要領がいい。

「ここはもうそろそろ終わりま・・・何です？」

少女が振り返ると、霊夢がじつとこちらを穴が空くほど凝視している。

「・・・ちよつと来て」

そう言われて、また神社の中の居住スペースに通された。

霊夢はしばらくタンスの中を物色していたが、目当てのものを見つけたらしい。

「あつたあつた。ねえ、これに着替えてくれる？」

「はあ……」

言われるままに奇術師の服を脱ぎ、差し出された服に着替えた。

「似合ってるわよ、まるで本職ね」

「これって……」

少女が身に着けているのは、霊夢のものによく似た巫女服だった。しかし、形状が違っている。霊夢の着ているものは、服と袖が離れている少し変わった巫女服のだが、彼女が着ているのは服と袖がつながっている、伝統的な巫女服である。

「私の古着で悪いけど、あの変な服じゃ場違いだし仕事中はこの服に着替えること。他の時は自由でいいわ」

「分かりました」

「じゃあ、掃除再開よ」

## 神社での出会い（後書き）

ここまで読んでくださり、本当にありがとうございます。気に入ったのならば、これからよろしくお願いします。気に入らなかったら・・・他の小説を読むことを強くおすすめします。

## 一日目、終了（前書き）

続きを読んでもらえるとは、感謝の極みです。ではとっぴ。

## 一日目、終了

夕暮れ時、長く続いた境内の掃除も、ようやく終わりを上げた。

「ふう、あなたがいてくれて助かったわ。いつも中途半端に終わらせてたから、なかなか綺麗にならなかつたのよねー」

「勿体なきお言葉です。しかし私もまだ未熟<sup>わたくし</sup>、明日はさらに精進しないと……」

「……なかなか渋い言い方をするわね。まあそんなことより、夕飯にしましょう。出来上がるまで休んでいいから」

一応はそう言っておいたのだが、夕飯の準備をしようとすると、  
「……本当に、休んでいいのよ？」

料理を作るところを、少し離れたところから一心不乱に観察されていた。手帳と鉛筆を用意しているところなど、用意がいい。

「いえ、記憶が無い身ですから、色々と学んでおいた方がいいだろうと思ひまして」

「うう……料理なら本があるから、作り方はそれを読んで覚えてちょうだい。今は、食器を並べてもらえるかしら」

その学習意欲は大いに賞賛すべきもののだが、あまりじろじろ見られると落ち着いて料理ができない。

「あ、ちなみに三人分ね」

「？ あと一人お客様でも？」

「ええ、招かれざる客、だけれど」

不思議そうに聞き返す少女に霊夢が答えると、

「霊夢、邪魔するぜ」

表で声がして、金髪の少女が入ってきた。

長髪で黒い帽子を被っていて、まるでおとぎ話に出てくる魔女のような姿をしている。

「まったく、呼んでもいないのに来るんだから……」

霊夢があきれた風と言う。すると金髪の少女が笑って答えた。

「それが魔女のクオリティー……って、お前は？」

奇術師の少女の方を見て問いかけてきた。霊夢が説明する。

「彼女、記憶喪失なのよ。今朝、神社の境内で出会ったの。何でも、奇術師なんだって」

「奇術師……あの、能力を使わずにものを消したり移動させたりするってやつか。ちよつと見せてもらえないか？」

「ええ、私わたくしの奇術でよろしければ」

断る理由も無く、夕飯前の余興にはちよつどいいと判断し、奇術師の少女は懐から小さな赤いビー玉を一つ取り出した。ちなみに、彼女は今巫女服のままである。

「はい、これは只のビー玉です。確認してください」

ビー玉を金髪の少女に渡す。

「確かに、普通のビー玉だな」

「ではこれを、このように隠します」

湯飲み三つをひっくり返し、その内の一つをビー玉にかぶせた。それから何度か、湯飲みを動かして場所をシャッフルしていく。やがてその動作をやめると、金髪の少女に向かって問いかけた。

「さて、ビー玉はどこにあるでしょう？」

「そんなの簡単だぜ、ここだ！」

金髪の少女が湯飲みをどけたが、そこには何も無かった。

「あれ！？確かにここだったはずだぜ……」

「残念、正解は……他の全部です」

奇術師の少女があとに残った二つの湯飲みをどけると、両方の湯飲みに一つずつ、赤いビー玉が入っていた。

「くーっ、やられた。モノホンの魔法使いが騙されちまったぜ」

金髪の少女は悔しがっていたが、どこか嬉しそうにも見えた。

「ちよつど良いところだったみたいね、ご飯にしましょう」

そこへ霊夢が深鍋をもってきた。いい匂いが漂う。

「お、肉じゃがか。ちよつど食べたいと思ってたんだよな」

「あ、皆わたさんの分わたくしがよそいましょう」

「おっ、気が利くな」

奇術師の少女が三つの器全てに肉じゃがをよそつと、三人一緒に手を合わせ、それから夕食が始まった。

「ところで名無し」

「何でしょう？」

食事の途中で、金髪の少女が切り出してきた。

「名前が無いってのも不便だろう？よかったら、私がつけてやってもいいぜ」

「やめときなさい、そいつのセンスはかなり悪いわ」

霊夢が横槍を入れてきた。

「何だよ霊夢、そこまで言うか？ひどくないか？」

「まあ・・・私は構いませんが」

そう言うのと、長髪の少女の顔が輝いた。逆に霊夢の方はというと、終わったな、という表情になっている。

「よし！じゃあお前の名前は・・・そうだな、“ガラシャ”でどうだ？」

「ガラシャ・・・ですか」

何となく懐かしい響きがある。自分の記憶に、何か関係のある名前なのだろうか。

「魔理沙にしてはセンスあるわね」

「お前本当にひどいな。それで、どうだ？気に入ってもらえたか？」

「ええ、とても良い名前を頂きました」

奇術師の少女が礼を言うと、魔理沙と呼ばれた金髪の少女は飛び上がって喜んだ。

「やったー、喜んでもらえて何よりだぜ！これからよろしくな、ガラシャ・・・おっと、自己紹介がまだだったぜ、私は霧雨魔理沙だ」

「こちらこそ。よろしく、魔理沙」

「良かったわねあなた、いい名前がもらえて」

魔理沙が自己紹介を終えたところで、ちょうど全員が夕食を食べ終えた。霊夢が皿と鍋をもつていき、ガラシャが卓袱台を拭いていると、魔理沙が近くに寄ってきた。

「おいガラシャ、お前どんな魔法を使ったんだ？」

「え？魔法・・・ですか？」

布巾を持った手を止め、聞き返す。

「そう、あいつああ見えて他人のことには結構無関心なんだよ。でもお前には初対面のはずなのに、かなり親身に接している」

「そ、そうなのですか？」

「ああ、長い間つき合っている私には分かるぜ。・・・何をやったんだ？」

「えつと・・・特に心当たりはな・・・いや、一つありました」

「おお、それは何だ？」

魔理沙が顔を近づけてくる。気圧されながら、答えた。

「お寶銭を入れました」

その答えを聞いて、彼女は納得、という感じの表情になった。

「ああ・・・なるほどな。じゃあ私は失礼するぜ」

言づが早い、すぐに帰って行ってしまった。

「・・・あら、魔理沙は？」

「お帰りになられました」

霊夢が戻ってきた頃には、もう魔理沙の姿は無かった。彼女の口からため息が漏れる。

「はあ・・・勝手にやって来て勝手に帰るんだから、全く・・・」

こうして奇術師の少女、ガラシャにとって最初の一日は、まるでつむじ風が通り過ぎるが如く、あっという間に過ぎていってしまった。

## 一日目、終了（後書き）

ちょっと長いでしょうか・・・不束者ですが、なにとぞよろしくお  
願いします。

## 二日目、少女と弾幕（前書き）

東方には外せない、弾幕とスペルがでてきます。

## 二日目、少女と弾幕

夜が明けた、第二日目である。

とは言っても、まだ辺りは薄暗い。そんな中、ガラシヤは夢うつこの状態で目を開いた。

「・・・霊夢・・・ですか？」

枕元に誰かが立っている。しかし、視界が何だかもやもやしていてはつきりしない。

「・・・忘れ物」

そんな感じのことをその人物はささやいた・・・ように思った時には、彼女は再び眠りの世界へと落ちていつていた。

目が覚めると、部屋に朝日が差し込んでいた。もう起きないといけない。

布団を押しに片づけ、昨日もらって用意しておいた巫女服に着替える。と、その時何かが畳の上に落ちているのに気がついた。拾い上げてみると、

「これは・・・カード？何のカードだろ」

幾何学模様の入った数枚のカードだった。昨日までは無かったのに、誰かが置いていったのだろうか。とりあえず、霊夢に相談してみることにした。

「霊夢、このカードは一体・・・？」

枕元にあったカードを見せると、すぐに霊夢は答えてくれた。

「これは、“スペルカード”よ。この幻想郷では欠かせない・・・

そっか、記憶喪失だっけ。今日は掃除の代わりに使い方を教えるわ、まずは外へ出しましょう」

というわけで、二人は神社の境内へ出てきた。今日もいい天気で、青空が広がっている。

「まずはどれか一枚カードを選んで」

言われて、適当に一枚カードを抜き出す。

「そのまま、カードに念じるの」

「（念じる……）」

すると足下に、カードに描かれたものと同じ幾何学模様の陣が現れた。

「わわっ、これは……」

「その状態になれば、スペルカードの力が使えるわ。次は……そうね、何か適当な目標を見つけて、攻撃するように念じてみて」

何かちよūdい目的はないかと周囲を見渡すと、大きめの石が目に入った。的はあれにしよう。

「（あの石に、攻撃する……）」

目を閉じて集中すると、彼女の足下から、棘の生えた球体が複数浮かび上がってきた。

「それ、行けっ！」

そして彼女が命じると、その球体たちは一斉に石の方へ飛んでいった。

「……できた！」

「おお、良いセンスじゃ……」

霊夢は感心しかけたが、次の瞬間、驚きを通り越してあきれってしまった。

陣から出現した球体たちは、石をめがけて飛んでいった……までは良かったのだが、石を破壊するとかそんなことはなく、そのまま石にへばりついている。

「……威力が話にならないわ」

「え、どうしてです？」

ガラシャが尋ねると、ため息をつきつつ、答えてくれた。

「スペルカードというのは、この幻想郷内での決闘に用いられる物なの。スピードは良いのだけど、威力がこれじゃあとても勝てないわ」

「そう・・・ですか」

「落ち込まなくてもいいじゃない、もつと他のも試してみれば・・・それにしても、これは何なのかしら？」

しゅんとなつてしまったガラシャを励ましつつ、霊夢が何気なくその球体の一つに触れると、

「あつっ!？」

突然、その場がぐくりと膝について倒れこんでしまった。すぐにガラシャが駆け寄る。

「れ、霊夢！大丈夫ですか!？」

「ええ・・・大丈夫、だけど・・・その」

「どうしたんです!？一体何が・・・？」

「・・・力が抜けちゃって、動けないわ。こんな力があつたのね、あなたのスペルは」

さつき球体に触れた瞬間、腕に何かびりつと電流のようなものが走り、直後には全身の力が抜けきって、立てなくなってしまったのだ。

「ああ、何だかすみません」

「いいのよ、これで使い道も分かったし・・・もう動けそうだわ、よつと」

霊夢が立ち上がって、パツパツと服を払う。体に力が戻ったようだ。

「さて、スペルカードが使えるようになったら、次は弾幕よ」

「だん・・・まく?」

「そう。決闘は弾幕とスペルカードの撃ち合いで勝負をするから、スペルカードを持っている以上、決闘に巻き込まれた時のために修得しておくべきよ」

「何やら物騒な・・・あまり巻き込まれたくはないですね」

「でもこの住人は弾幕が大好きだから、そう言っただけならいいわ。・・・じゃあまずお手本よ、それっ」

霊夢が前方に手をかざすと、彼女の周囲から色とりどりの光弾がいくつも発生し、ガラシヤの方に飛んできた。

「えっ？いきなり！？ちよ、ちよと待って！！」

光弾の弾幕が目の前に迫る。もう避ける暇などなさそうだ。まずい、と思った瞬間ある考えが閃いた。

さっきの要領を思い出し、もう一度球体を出現させる。今度は飛ばすのではなく、自分の前に密集させ、壁のようにした。

そこへ弾幕がぶつかり、煙を上げる。衝撃で少々形が崩れたが、彼女の作った壁はそこに健在だった。

「おっ、そういう使い方もあるわけね」

「あゝびつくりした・・・不意打ちはひどいですよ」

「さ、あなたの番よ。遠慮無く撃ってきなさい」

と言われても、撃ち方が分からない。

「えーと、どうやって撃てば・・・？」

「イメージよ、イメージ。スペルカードの時みたいに「なるほど」」

イメージさえあれば、この幻想郷では何でもできるのではないだろうか。一瞬そう思ったが、面倒なので考えないことにした。

気分を落ち着けて、両手を前に出す。そして霊夢の弾幕を思い出しながら、自分の弾幕をイメージする。

「・・・（こんな感じかな？）」

すると周囲から黒色と白色をした弾幕が生じた。

「うまいうまい、そのまま相手に向かって飛ばすのよ」

「・・・行け！」

ガラシヤが念じると、弾幕は霊夢の方へ飛んでいく。

「おっと・・・」

速い、ガラシヤの弾幕を避けつつ霊夢はそう思った。弾幕には慣

れているのだが、ここまでの速度を誇る弾幕にはあまりお目に掛か  
ったことはない。

「凄いわガラシヤ、あなたには才能がありそうね」

「えっ、そう・・・ですか？」

できれば弾幕もスペルカードも使いたくないのだが、そう言われ  
ると、少し照れる。

「さて、ちょうどいい時間だしお昼にしましょうか。食べ終わった  
ら、また練習よ」

「は、はい！頑張ります！」

かれこれ、この弾幕講座は丸一日続くこととなった。

第二日目の、終わりである。

二日目、少女と弾幕（後書き）

やっぱり長い……？もっと簡潔にまとめきれぬ才能がほしいです。

魔法の森と、人形と（前書き）

タイトル通り、あの人が出ます。

## 魔法の森と、人形と

「ここはどこ・・・？」

薄暗い森の中、ガラシヤはふらふらと歩いていた。誰がどう見ても分かる、迷子の状態である。

「どうしてこうなったのでしたっけ・・・」

今までのことを回想してみる。

ちよつと前の話。

「ガラシヤ、ちよつとお使いを頼まれてもらえるかしら？」

境内の掃除が終わり、休んでいると、そこへ霊夢がやってきた。手に何か包みを持っている。

「はい、なんなりと」

「この荷物がある人のところまで届けて欲しいの。あなた、ここへ来てから神社に缶詰だったでしょ？こんな形で悪いけど、外に出てみたらどうかね、って」

確かに、思い返すと今までこの神社から一步も外に出ていない。外のことを知るいい機会にもなりそうだし、ありがたい申し出だ。「お心遣い、感謝します。それで、どこへ届ければよろしいのですか？」

尋ねると、四つ折りにされた紙と何かお守りのようなものを渡された。

「これは届け先までの地図、そしてこれは障気を避けるお守りよ。絶対に失くさないよう、気をつけて」

「障気・・・って何ですか？」

「生身の人間が浴びると害のある邪悪な気よ。届け先へ行くには、この障気が吹き出している森を抜けなければいけないの。くれぐれも、お守りだけは失くしたら駄目よ」

そう聞くと、ちよっと怖くなってくる。しかし、一度引き受けた以上、今更放棄することはできなかった。

「は、はい！では、行ってきます」

「行ってらっしゃい、気をつけてね（・・・頑張れ、ガラシャ）」  
彼女の後ろ姿を見送りながら、霊夢は心の中で密かに激励した。

神社を出てしばらく歩くと、言われた通りの森へたどり着いた。

「ここを抜ければ届け先・・・よし、行きますか」

覚悟を決めて森の中へ入る。木がたくさん生い茂っていて、まだ昼間のはずなのに辺りは薄暗い。

それに、障気とやらの影響なのか不気味に静かである。

「うわあ、気味が悪いですね・・・早く出たい・・・」

と、その時何かにつまづいた。石だったような、木の根だったような気もするが、今となってはよく覚えていない。とにかく、何かにつまづいて転んでしまった。

「うわーっ！！」

しかも運の悪いことに、転んだ先には急斜面が。そのまま斜面を流されてしまい、気がつくともとの道から完全に外れてしまっていた。

「痛たた・・・ここはどこ？」

地図を広げるが、自分がいるであろう場所は載っていない。そして冒頭へ。

「はあ、どうしましょう・・・」

ガラシヤは途方に暮れた。幸い荷物は無事で、お守りも失くさなかったが、これでは届け先へ行くことができない上、帰ることもできない。

あてもなくうろつろ歩いていたが、疲れてきた。これでは体力の無駄遣いだ。

どこか休めるような場所はないかと辺りを見回すと、ちょうど座るのに良さそうな岩が目に入った。

「お、ちょうどいいところに・・・よいしょ」

岩に腰掛けると、ひんやりした感触が伝わってきた。そのおかげで、頭が冷えて気分も少し落ち着いてきた。

これからどうしようかと考え始めた矢先、ふと近くに、土砂が積もって小さな山ができているのに気づいた。しかもその下から、綺麗な色をした布地がのぞいている。

「・・・何でしょうか、これ？」

その端をつまんで引っ張ってみたが、土砂の重みで引っ張り出せない。

しかし、この森で見つけた唯一の人工物である。何かの手がかりになるかもしれない。そう思うと諦めきれず、どうやって引っ張り出すか考えることにした。

「うーん・・・やはり地道に崩すしかありませんね」

ガラシヤはその小山を崩しにかかった。もちろん素手で、である。しかし、土砂が水を吸い込んで固まっているのか、なかなか固い。

「うわー、爪がはがれそうですね・・・でも、頑張ろう」

時々小山を蹴飛ばしたりしながら、ゆっくりだが着実に崩していく。途中、手が痛くなって何度か泣きそうになったが、そこは我慢した。始めてからどれぐらい経った頃だろうか、その時には、土砂の小山はもはや山という形をとどめてはおらず、小さな塚のようになっていた。

「ふうー、やっと終わった・・・」

爪ははがれなかったが、手のひらや指には無数の擦り傷ができていた。

「さて、さっきの布は・・・あ、あった」

もう一度布地をつまんで引つ張ると、ずるずると何かが出てきた。ぱつと見ただけでは分からなかったが、土を払ってよく見てみるとそれは可愛らしい西洋風の人形だった。

あの布地は、この人形の着ている服だったのだ。

「あら可愛い。こんな所に埋まっていたなんてお気の毒に・・・」  
汚れを払っていると、その時人形がガラシヤの手を離れた。

「あっ」

両手で受け止めようとしたがその必要はなく、人形は二本の足でうまく地面に降りた。そしてあるうことか、そのまま歩き出した。

「・・・！！？」

驚きで言葉が出ない。呆然としてみると、人形が振り返って手招きをしてきた。どうやら、ついてこいと言っているらしい。

どうしようか、ひとりで動く人形についていくのも怖いが、ここにこのまま残るのもあまり得策ではない。考えているうちに、人形はまた歩き始めていた。

「あっ、お人形さん！ちよつと待ってくださいよー！！」

もう考えている暇はない。ガラシヤは人形のあとを追って走り出した。

しばらく人形の後について歩いていくと、森が少しずつ拓けてきた。どうやら、ついてきて正解だったようだ。

それにしても、とガラシヤは考えていた。あの人形はどうやって動いているのだろうか、持ち上げた時にはとても軽かったし、何か動く仕掛けがあるようには思えない。不可解なことばかりである。

そう思いながらも、ひたすら人形の背中を追いつける。すると、

目の前に洋館じみた家が現れた。人形は入口らしきドアを開け、その中へ入っていく。

ガラシヤは少し困った。あの人形に案内されてここまで来たとはいえ、他人の家である。自分も入ろうか、入るまいか決めかねて、おろおろしていると入口が向こうから開いた。

「・・・この人かしら？あなたを助けたと言うのは」

出てきたのはショートカットの金髪に赤いカチューシャをした、西洋人形のような少女だった。その足下にさっきの人形がいて、こくんとうなずく。

「お入りなさい、大変だったそうじゃないの。それに、あなたと話したいこともあるわ」

「は、はい・・・お邪魔致します」

魔法の森と、人形と（後書き）

自分も幻想郷に・・・行きたくない。

魔法の森と、人形と その2 (前書き)

前回の話の続きです。ではどうぞ。

## 魔法の森と、人形と その2

中へ入ると、客間のような部屋に通された。真ん中に大きめのテーブルがあり、向かい合って長椅子が二つ並んでいる。

「さ、お掛けになって」

そう促され長椅子に腰掛けると、ショートカットの少女はその向かい側に座った。

そこへ一体の人形がトレイに、紅茶の入ったティーカップを二つ乗せて持ってきた。先ほどの人形と似ているが、服が少し違う。

「ありがとう、下がっていいわよ。あと、あの子を呼んできてもらえる?」

ティーカップを受け取り、自分とガラシヤの前に置くと、彼女はそう言った。言いつけ通りに、人形はトレイを下げて戻っていく。

「あの、これは一体・・・?」

「ああ、悪いわね、色々と言いきびれてしまつて。簡潔にいうと、あなたにお礼を言いたいと思つているの」

するとそこへ、森で出会つた人形がやつてきた。服を着替えたのか、清潔なものになっていた。それに、体中についていた汚れも綺麗に落ちている。

ショートカットの少女はその人形を抱えると、自分の膝の上に載せて話を続けた。

「この子、かなり前から行方不明でね、私も一生懸命探したのだけれど、どうしても見つからなくて、もう諦めかけてたのよ」

「はあ・・・そんなことが」

「そんな中今日ひよっこり帰ってきて、誰かに助けられたと言うから、その人には一言お礼を言っておかないと、と思つて・・・この子を助けてくれて、ありがとう」

ショートカットの少女が頭を下げると、人形も一緒に頭を下げた。「いや・・・そんなお礼を言われることなど、何も・・・」

「そういえば、この子から聞いたわ。道に迷っていたんですって？どこへ行くこうとしたのかしら」

この人形はあの時、土の中で聞いていたのだろうか。

「ええ、届け物を頼まれたのですが・・・アリス・マーガトロイドという人物をご存じでしょうか？」

「あ、それ私よ」

何という偶然か。道に迷った上に不思議な人形についていったら、目的地まで到着してしまっていた。

「ご、ご本人でしたか。博麗霊夢さんからのお届け物です」

「ああ、魔理沙経由で頼んだやつだわ。ありがとう」

包みを渡す。これで、晴れてお使い完了というわけだ。

「まあこうして出会ったのも何かの縁かも知れないし、もう少しゆつくりしていくといいわ・・・ところで、見かけない顔ね。あなた名前は？」

紅茶に口をつけながら、アリスが尋ねてきた。ガラシャも少し飲んでから、答える。

「私はガラシャ、と申します。記憶喪失の奇術師で、今は博麗神社でお世話になっている身です」

「記憶がない・・・私にはとても分からないけど、それは大変そうですね」

「いえ、結構どうにでもなるものですよ。ところで、この家にいるお人形達は一体・・・？」

今となつてはそれほど驚かないが、さつきからそこらを人形達が掃除したり駆け回ったりしている。

「ああ、そういえば説明していなかったわね。この子たちは私の魔力を込めた人形で、思うとおりに動かせるの」

「へえ、すごいですね。でも、めいめい違うことをやっているのはどうしてです？」

「完全な操り人形のようなものではないのよ。私の言うことは聞くけれど、それ以外の時は各自で思い思いに動いているわ」

「そうなのですか、何だか微笑ましいですね」

小さな体に見合った、小さな帚やモップで床の掃除をしている人形もいれば、窓に登って窓ふきをしているものもいる。中には、掃除をせず走り回って鬼ごっこをしたり、物陰に隠れている人形もいた。

まるで、おとぎ話のページだ。

「ええ、自分の妹とか娘ができたみたいで可愛いものよ」

「妹・・・ですか」

ふと、記憶を失くす前の自分にはどんな家族がいたのかと考えてしまった。兄弟姉妹はいたのだろうか。いたとすれば、仲は良かったのだろうか・・・

「あら、どうかした？私、何か気に障ることを言ったかしら・・・」  
はっと気づくと、アリスが心配そうにこちらを見ていた。

「い、いえ何でもありません。そうだ、お茶のお礼に私の奇術を披露しようと思うのですが、いかがですか？」

「面白そうね、ぜひお願いするわ」

始めようとする、いつの間にか周りに他の人形達も集まってきた。

まずは懐からトランプを取り出して、皆に見せる。

「いたって普通のトランプです。ここから、スペードの札10、J、Q、K、Aを抜き出します。いわゆる、ロイヤルストレートフラッシュの組み合わせです」

抜き出した札を一通り並べると、ガラシャはまたそれを山札に戻した。そして山札をアリスに渡す。

「アリス、この札をよく切って、終わったらテーブルの上に置いてください」

「分かったわ」

彼女は何度か山札をシャッフルすると、言われた通りテーブルの上にそれを置いた。

「さて、さっきの五枚は確実に山札の中で散り散りのはずです。そ

れに、私は山札わたくしに手を触れてはいけません。しかし・・・アリス、上から五枚めくって並べてみてください」

アリスがカードをめくっていく。一枚目は、スペードのA。二枚目は、スペードのK。三枚目は、スペードのQ。

「これって、まさか・・・」

「続けてください」

四枚目は、スペードのJ。最後の五枚目は、スペードの10だった。見事にロイヤルストレートフラッシュが、完成していた。

「すごいわ、一体どういう仕掛けなのかしら」

驚いた顔でアリスが言うと、周りの人形達がガラシヤに拍手を送ってきた。

「それは秘密ですが、楽しんで頂けて光栄です。おっと、そろそろ帰らないと・・・お邪魔しました、紅茶までごちそうになってしまつて」

「いいのよ、面白いものを見せてもらったし。あと、帰りに見送りをつけるわ」

「何から何まですみません」

「そう恐縮しなくてもいいわ。良かったら、また遊びにいらっしやい」

外へ出ると、後から人形が出てきて、前に立って歩き出した。その後について、ガラシヤも歩き出す。再び森の中へ入ったが、最初の時とは違ってすぐに出口へたどり着いた。

そこで人形は歩みを止めて振り向いた。見送りはここまで、というところらしい。

「ここまで道案内、ありがとうございます。さよなら、お人形さん」手を振ると、人形も振りかえしてきた。それからお互いの姿が見えなくなるまで、互いにずっと手を振っていた。

空はいつの間にか、真っ赤に染まっている。・・・道に迷うのも悪いことばかりじゃない、ガラシヤにとって、そう思えた一日だった。



魔法の森と、人形と その2 (後書き)

人形が動いたら・・・かわいいでしょうね。種類によりですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7244z/>

---

幻想、神社と忘れ物

2011年12月24日11時47分発行